

# 極楽寺だより

2018(平成30)年3月号



発行所：極楽寺（浄土真宗本願寺派） ☎759-3803 山口県長門市三隅下野波瀬 3633 ☎0837-43-0625

## 春の彼岸会法要のご案内

昨年より始めました、春の彼岸会法要。

今年は趣向じゆうきゆうを変え、ドキュメンタリー映画の監督・森達也もりたつやさんをご講師に迎えて、特別講演会を行います。

「わかりやすさ」「善か悪か」「敵か味方か」といった単純化が進んでいる時代です。「視点してんを変えることで、違ったものが見えてくる」「多面的ためんてきで、多層的たそうてきで、多重的たじゅうてきだからこそ世界は素晴すばらしい」と言われる森さんの指摘が、私と世界との向き合い方を問い直す、ご縁になればと思つています。

三月四日(日)

昼一時半より

講師 映画監督・作家

森 達也 師



森 達也 (もりたつや)

1956年広島県呉市生まれ。ディレクターとして、テレビ・ドキュメンタリー作品を多く制作。98年オウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画「A」を公開、ベルリン映画祭に正式招待され、海外でも高い評価を受ける。2001年映画「A2」を公開し、山形国際ドキュメンタリー映画祭で、特別賞・市民賞を受賞する。11年「A3」で講談社ノンフィクション賞を受賞。現在は映像・活字双方から独自の世界を構築している。16年、作曲家・佐村河内守に密着したドキュメンタリー映画「FAKE」で話題を博す。明治大学情報コミュニケーション学部特任教授。



## 森 達也さんから、 教えられたこと

今回の春の彼岸会法要は、ドキュメンタリーの映

画監督・森達也さんを講師に迎え、特別講演会を行

います。

森さんとの出遇いから、もう十五年以上。福岡時代の友人と、森

さんの作品『A』『A2』の上映会を企画したことが、きっかけで

した。以来、お付き合いさせていただく中で、私はとても大切なこ

とを教えられてきました。実はそれが、私が改めて仏教に出遇い直

し、同時に仏教がリアルなものとなっていく、ご縁にもなったので

す。

お経に、「群盲象を評す」といわれる話があります。今の人権感

覚からいえば、配慮に欠けるようにも感じられる譬え話ですが、

とても大切なことが示されています。

ある王様が大臣に、目の見えない人たちを集め、象を触らせるよ

う命じました。その後王様は、一人一人呼びよせて、「象とは

どういう動物か」とたずねました。すると、象の鼻を触った人は「象

とは杵のような動物だ」と言います。象の耳を触った人は「箕のよ

うだ」と言います。頭を触った人は「石のようだ」と言い、足を触

った人は「木白のようだ」、背中を触った人は「ベッドのようだ」

と言ったというお話です。

これでは、象の説明にはなりません。

しかし、象の説明でないかというと、

そうでもありません。象の一部ではあ

りますが、象という生き物そのものの

説明ではないのです。つまりこの譬え

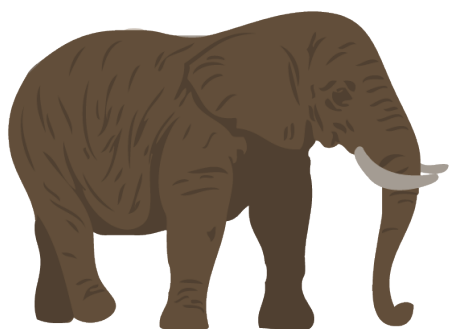
は、道理に暗い者は、物事の一部分しか

理解することができないにもかかわらず、

それで全てを理解したと思っっていることを指摘されるのです。

これは、目が見えない人をバカにした、失礼な話のように受け止

められがちです。しかし、目が見えない人が「手にふれた部



分だけで、全てを理解した気になる」と、どうなるでしょう。そこにある段差で転んでしまいかもしれない。向かってくる自動車に気づかないかもしれない。安易に決めつけることは、大きな事故につながりかねないのです。目が見えないからこそ、違う感じ方、知り方で世界と向き合っておられるのです。

たとえば、足の裏の感触で畳の目の向きを感覚し、そこから部屋の壁がどちらに面しているのかを知る。あるいは、音の反響具合からカーテンが開いているかどうかを判断し、外から聞こえてくる車の交通量からおよその時間を推測する。人によって手がかりにする情報は違いますが、見えない人は、そうしたことを当たり前のように行っています。

〔「目が見えない人は、世界をどう見ているのか」伊藤亜紗〕

翻って、肉眼が見える私たちはどうなのか。見えるだけに視覚に頼り、捉われ、物事の一部しか理解していないのにもかかわらず、全てを理解したと思っではないのでしょうか。

それは、私たちの生活に大きな影響力を持つ、テレビなど

のメディアについても同じことです。よく、「カメラが捉えた真実」という番組の宣伝文句がありますが、それは事実ではあっても、真実ではありません。なぜなら、映し出された映像は、カメラで切り取った一部でしかないのでから。

僕の周りには世界がある。あなたの周りにもある。三六〇度すべてにある。でもカメラはまず、この無限の世界を、四角いフレームの枠の中に限定する。その瞬間、区切られたフレームの外の世界は、存在しないことになってしまう。

何かを撮るといふ行為は、何かを隠す行為と同じことなのだ。

〔「世界を信じるためのメソッド」森 達也〕

私たちは、映し出された一部を見て、全てを理解したと思い込んではいないでしょうか。見えていない部分があることを、自覚しているのでしょうか。

「群盲象を評す」という話は、「ものごとの道理に暗い者」を「盲人」として表現する、とても繊細な譬え話なのです。

ファインダーに片目を当ててカメラを回しながら、僕は自分が世界を選び直していることに気がついた。取捨選択している。／選ぶのは僕だ。そして誰を取るかで、見る人の印象は全然違う。

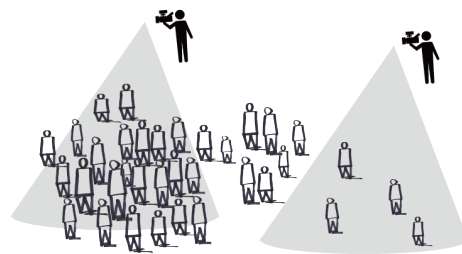
〔世界を信じるためのメソッド〕森 達也

映し出された映像は、撮る人、編集する人の意図で、大きく変わります。それは「ここに苦しんでいる人がいることを、知らせたい」というメッセージかもしれない。「これは、視聴率がとれるぞ」という計算かもしれないのです。

ならば、一部しか見ることができない私たちは、どうすればいいのか。それは、見えていないことを自覚し、謙虚な態度で想像し、感じ、考えていく。世界を広げ、深めていくしかないのでしょうか。

生来、妙に正義感の強い私は、○か×か、正義が悪かで決める傾向がありました。視野も、人間の幅も狭かったように思い

どこを切り取るかで、景色が変わる



ます。「私は正しい」という思い込みで、他人を決めつけ、自分をも決めつけていました。振り返れば、とても失礼で、恥ずかしいことだったと思います。

しかしそのフレームを、森達也という人との出遇いで揺さぶられ、それまでとはまったく違う、豊かな世界が見えてきたのです。

とは言っても、広がってこの程度ですからね。教えられなければ、どうなっていたことか…。

そして、改めて考えると、

ブッダは、神でも預言者でもありません。私たちは通常自分という枠組みを通して物事を見ていますが、その枠組みをはずしてすべてをありのまま知見することができる人のことです。

仏教は「一体自分はどんな枠組みで生きているのか」を点検し、その枠組みをできる限り強くしないようにトレーニングをするというタイプの「宗教」です。〔いきなりはじめる仏教生活〕釈 徹宗

と、釈徹宗先生が指摘されるように、そもそも仏教とは、

私の持っているフレーム・枠組みわくぐみを揺さぶる教えであったと、改めて気づかされたのです。森さんとの出遇であいは、私にとって仏教と改めて出遇い直し、仏教をリアルに感じるきっかけとなりました。冒頭ぼうとうの「群盲象を評す」の話も、森さんとお付き合いさせていただく中で、腑ふに落ちたことの一つでした。

ドキュメンタリーという分野ぶんやの現場げんばから、森さんが気づかれたことは、私たちにとっても大切なことを教えてください。そこからは、仏教に改めて出遇い直すご縁にもなるように願っています。

とても大切な時間になるはずです。お誘いあわせ、ぜひお参り下さい。■



『声に出して、お念仏称えましょうキャンペーン』は、お休みします。

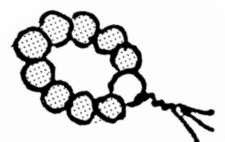


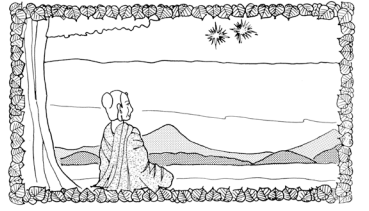
極楽寺ホームページ  
<http://極楽寺.com/>

極楽寺だよりの過去の記事をはじめ、盛りだくさんの内容です。

お念珠、修理いたします。

お念珠の紐は、切れるもの。特に、不吉なことではありません。お寺まで、お持ち下さい。修理いたします。





## 極楽寺揭示伝道 けいじてんどう



## 3月の言葉

浄土真宗では葬儀や法事の際、阿弥陀様を中心にお参りします。ご遺体やお骨が中心ではありません。自宅での通夜の時など、お棺が脇にあっても、お仏壇の前でお勤めをします。一見、亡き人を粗末にしているように見えるかもしれませんが、そうではないのです。亡き人を本当に大切にするために、阿弥陀様を中心にお参りするので。

以前、ご門徒のおじいさんが亡くなられた時のお話です。お孫さんをとともかわいがっておられた方でした。葬儀の後、娘さんから相談を受けたのです。「おじいちゃんが亡くなってから、うちの息子が（おじいさんにとっては、お孫さんです）熱を出して寝込んでいます。おじいちゃんが迷っているのではないかと、心配なのですが…」と。

気持ちにはわかるのです。そんな不安を煽る情報が、飛び交っ

ている時代ですから。でも、お孫さんのことを大切にされてきたおじいちゃんが、そんなことをされると思いますか？おじいちゃんは「オレのせいだよ！」と、怒られるのではないですか。逆に、失礼なことになりませんか？

私たちは、誰もが不安な思いを持っています。しかし、不安な気持ちに安易に流されてしまうと、亡き人に対して失礼なことを、遺された人たちを傷つけることをしかねないのです。

「四十九日法要（満中陰法要）が三月にまたがったらいけない」という話があります。浄土真宗ではそんなことは言いませんが、気にされる方が多くあります。なぜでしょうか。調べてみると、どうも語呂合わせからきているようです。

「四十九（しじゅうく）」↓「始終、苦」

「三月（みつき）」↓「身つき（みつき）」↓「身につく」

これらが組み合わされて、「始終（いつも）、苦が身につく」から、やめなさいというわけです。単なる語呂合わせとバカにしてはいけません。葬儀の際に「三月にまたがったらいけない」と言われたら、遺族の人たちには大きな不安やプレッシャーを与えるでしょう。近頃はみんな忙しいですから、三月にまたがらざるを得ない場合

があります。そんな時に、たまたま悲しみ事が重なってしまおうと、「ほら見る。三月にまたがったからだ」という声が出てくる。これが遺族を苦しめるのです。

「友引の日には葬儀をしない」ということも、同様です。「友引」とは中国の暦のことばで、仏教とは何の関係ありません。それが字面だけをとらえられて、「友達を引っ張っていくから」と恐れ、葬儀をしなくなったのです。でも、考えてみてください。亡くなられた方が、友達を引っ張っていくような人と思っっているのですか？そんな受け止め方は、亡き人に対してとても失礼な態度ではないでしょうか。※とは言っても、極楽寺では関係のないことだからと無理強いはしていません。悲しみの中におられる遺族に、お寺からもプレッシャーを与えるわけにはいきませんから。但し、「これ以上、他の人を不安にさせたり、傷つけないように、関係ないと理解した上でして下さいね」とお願いをするようにしています。

人間ですから、誰もが不安な気持ちを抱えています。しかし、不安な気持ちに流されてしまった時、私たちは亡き人を見失うのです。▼



遺された方を傷つけてしまい、亡き人を仏様から怨霊や亡霊へと引きずり降ろしてしまうのです。仏様は崇られる方ではありません。「亡き人が迷っている」と不安に思うのは、実は「自分が迷っている」からなのです。だからこそ、浄土真宗では、阿弥陀様のみ教えを通して、仏様になられた亡き方と出遇っていくという形をとる。その為に、阿弥陀様を中心にお参りするのです。

不安な気持ちは、誰もが持っています。しかしその不安を、逆に生きる力にされた、私たちの先輩をご紹介します。

金沢のお婆さんで、山崎ヨンさんという方がおられました。障害を持つ子どもさんを抱えながら、女手ひとつで生き抜いてこられたお婆さんです。ご苦労の中にも、阿弥陀様とともに確かな人生を歩まれた方でした。その山崎ヨンさんのところに、ある新興宗教の方が来られて「ばあちゃん不安ないか」と訊ねられたそうです。「ええ、不安ありますよ」というと、その人は「私らその不安をとる会を無料ですとるさけ、ばあちゃんもそこにいって、不安とってもらたらどうや」と言われました。するとヨンさんは、こう答えられたというのです。

「そうか、ご苦労さんやねえ。不安の世の中でねえ。そやけ」

どこの不安、あんたらにあげてしもうたら、わたしは何を力に生きていったらいいがやろうねえ。不安は私のいのちやもん」

(『生命の大地に根を下ろし』松本梶丸)

不安があるからこそ、こんな私でもまことの言葉を聞かすにはおれない。阿弥陀様のみ教えに遇あわずにはおれない。不安があるからこそ、今日まで歩まされてきた。不安が私のいのちだ。不安をあんたにあげてしもうたら、人生空むなしく無駄むだに生きるだけになる。だからこそ「何を力に生きていったらいいがやろうねえ」と、答えられたのです。

不安とは、大切なことを見失みうしない、迷まよいを深ふかめていく私に、今のままでいいのかと私の生き方を問とい返かえしてくる力だといただかれた方がおられるのです。私たちが無なくそうとする、その不安を、仏様からのうながしとただかれ、生きる力とされた先輩方があるので、す。

ここにこそ、自分の人生を、そして亡き人の人生を、より豊かに尊たくいただくいていく道があるのだと、教えられるのです。■



極楽寺掲示伝道

物を粗末にし

人を粗末にすれば

自分も粗末にされる



2月の言葉

心療内科医の海原純子うみはらじゅんこさんという方が、こんなコラムを書いておられました。

北朝鮮情勢を意い識ししたのか、今、アメリカでは核シかくェルターが売られているそうです。とはいっても、昔の防空壕ぼうくうごうというようなイメージとは全く違い、中は超高級ホテルのようにゴージャスで、ヤシの木が揺ゆれる映像が流れ、波が起こるプールまで設置せつちされたものもあるのだとか。しかも、それがすべて売れたというのです。購入こうにゆうした人も、売った人も、「準備じゅんびをしておけば不安は減へる」と言ったそうなのですが、それを聞きながら海原さんは、「これは、絶対に「おかしい」と思われたそうです。

なぜなら、核シかくェルターに避ひ難なんできるのはわずかな人数、せいぜい自分と家族くらいなもの。そして、自分たちだけは安全な





場所においても、核戦争かくせんそうが起れば地上では空気が汚染おせんされ、多くの人や動たちが死んでいく悲惨ひさんな状況になるそんな時に、自分だけはそのすぐ下で、プールで泳およぎながら、平気でいられるのだろうか。もし自分がそんな状況に置おかれたらと思うだけで、ぞっとする。何より、核で汚染された地球で、その後生きていけるのだろうか。だから、「早めの準備」というのはシェルターを造つくったり売ったりすることではなく、核による争いがおこらないよう働きかけをすることなのではないかと。

そして、こう続けられるのです。

また「助かる。生き残る」ことは単に体だけを安全な場におくことではない。深く傷きずつくであろう心についても考えてほしい。心が生き残らなければ人は生き続けることはできない。もしシェルターに避難ひなんする人のほとんどが、他者の痛みいたなど全く気かけず、自分だけ安全ならそれでいいと思っていても、そのなかに一人、傷きずつき心を落ちこませる人がいたら、その人の気分は周囲しゅういに伝わっていくものである。▼

「結局人間は自分だけがよければいい」「いざとなれば他人を置いて本能的ほんのうてきに逃にげるものだ」という人もいる。それは確かだろう。しかし、命の危険を感じた時に他人を本能的に助けた方たちの話を、私は震災しんさいや事件、事故の現場でくり返してきた。そしてそうした方たちの物語が心の中に刻おみこまれている。また、自分だけ助かったため罪悪感ざいあくかんにさいなまれ、自分を責せめる方たちとかかわることもある。準備とは何か。他者を傷つけずお互いを受け入れる心のあり方について考え、実践じっせんする以外にないだろう。

(毎日新聞日曜版「新・心のサプリ」海原純子 二〇一七年十一月十九日)



「心が生き残らなければ人は生き続けることはできない」この言葉は、ズシンと響ひびきました。私たちは、一体何を求めて生きているのでしょうか。便利な世の中になり、モノは豊かになりましたが、心は豊かになったのでしょうか。▼

ある小学生の女の子が、不登校になりました。仮にA子ちゃん  
としましょう。同じクラスで近所に住んでいるB子が、少し回り  
道になるけれども「A子ちゃん、一緒に学校に行こう」と声をか  
けに行くと、A子ちゃんは少しずつ学校に来れるようになったの  
だそうです。

それが四、五日続きました。ある朝、B子ちゃんを送り出そう  
とした母親が、学校ではない方向に行くB子ちゃんを見て、

「どうしたの。あなた、学校は逆方向でしょう」と尋ねると、

「A子ちゃんを誘いに行くの」

「どうして、そんなことをしなくてはならないの」

「でも、A子ちゃんが学校にしばらく来れなかったから、

声をかけにいって一緒に行ってるの」と言ったのです。

母親は、怒って言いました。

「そんな余計なことする暇があったら、

勉強しなさい。他人のことを考える

余裕はないのよ」

すると、今度は、そのB子ちゃんが



学校に行けなくなってしまうたというのです。

（『人間の物差し 仏さまの物差し』久保山教善）

「人を押しつけてでも成績を上げる」これが、まさに現代社会に生  
きる私たちが求めているものなのでしょう。だからこそ母親は、そ  
れが娘のためだと思っっているのです。しかし、A子ちゃんのことを  
思いやることで、B子ちゃんの心は豊かに成長していったのです。

人を粗末にすることは、自分の心を粗末にすることになり、心を  
殺していく。心が生き残らなければ、人は生き続けることはできな  
いのです。

私たちは、どこに向かって生きていますか。何を大切に  
し、何を粗末にしながら生きていますか。

阿彌陀如来という仏様は、すべての生きとし生けるいのちを尊  
び、救うという願い（本願）を建てられました。その願いを聞き、  
その願いに生きた人の歴史が、問いかけて下さっています。 ■



# ゆうや 長男・融也が、 得度とくどします



京都の龍谷大学に通う住職の長男・融也が、得度（僧侶となる儀式）を受けることになりました。僧侶となりますが、これからまだまだ学びが必要です。皆さまのお育てをいただきたいと思います。どうぞ、よろしくお願ひします。



□私と次男は、お笑いが大好き。中でも『アメトーク』は、とても楽しみにしている番組のひとつです。ある共通の趣味や特徴をもった芸人を集めてトークする人気番組ですが、ここ最近で、特に印象的だったのが「定時制高校芸人」の回でした。様々な理由で定時制高校に通っていた芸人さんたちが、年上の同級生とのちょっと変わった学園生活や、切なすぎる文化祭などのエピソードを語るのが、切なくて、おかしくて、そして温かくて。□その中で、一人の若手芸人さんが紹介してくれた話が、とても心に残りました。

彼はよく、クラスメイトのヤンキーにいじめられていたそうです。その日も絡まれていたところ、同じくクラスメイトの金さんという80歳のおばあさんが「いじめたらあかん」と立ちはだかってくれました。ヤンキーは、金さんにも「なんや、クソばばあ」と絡んでいきます。どうなることかと思った時、金さんは突然ヤンキーを抱きしめて言ったそうです。「ここに敵はおらん！」するとヤンキーは、突然ボロボロと涙をこぼしはじめ、その場は見事に丸く収まったというのです。心温まる良い話で、感動してしまいました。□これは、おばあさんにしかできないことだと思います。私のような50過ぎのおっさんが、ヤンキーを抱きしめて、「俺は俺で、お前は俺の仇敵だ」といふのがオチ。おばあさんのチカラって、凄いですよ。□近頃は、お年寄りに元気がないように思います。しかし、お年寄りにしかできないことがあるのです。何より、殺伐とした今の時代だからこそ、ほっこりさせてくださるお年寄りの雰囲気は、若い人たちの支えとなりえます。これはお年寄りとの接点の多い住職だからこそ、断言できること。もっともっと、アピールせねばと思っている今日この頃です。（住職）



しゃく てっしゅう  
釈 徹宗先生が、長門に来られます！

極楽寺だより



2018(平成30)年3月号

今回は、落語と仏教をテーマにお話しされます。

桂坊枝師匠の、落語もありますよ。

専如門主伝灯奉告法要記念 大津東組記念行事

# 伝統文化と仏教



落語  
桂  
坊枝師匠

講演  
釈  
徹宗師



3月9日(金)

長門市中央公民館

開会 13時30分 終了 16時30分予定

入場料 大人1,000円 高校生以下無料

お寺で送迎しますので、お申し出ください。  
12時50分出発予定。

チケットは、お寺にあります。  
春の彼岸会で、申し込みを受け付けます。  
会場で、当日券も販売しています。

駐車場が満車の場合は、  
法蓮寺駐車場へ停めて下さい。

